

新たなメディア環境における映像視聴 ——テレビ離れという現象を踏まえて

文化創造研究科メディアコミュニケーション領域

14001CMM 陳 曼

修士論文要旨

21世紀以降インターネットの普及と情報通信機器の急速な進化によって、私たちのメディア環境はめまぐるしく変化し続けている。大学のキャンパスでは、いつの間にか携帯電話がスマートフォンに入れ替わり、タブレット端末やノートPCも含めて、常にモバイル機器の小さい画面に向かって何かをチェックしている学生の姿が目につく。すべての人々が大学生のようにモバイル機器を重要視しているわけではないが、情報通信機器の発達に伴う新たなメディア環境は、多くの人々がテレビや新聞といったマスメディアに依存することなく、時間や場所の制約を受けずに多種多様な情報を各自の嗜好に応じて選択的に取得することを可能にしているのである。

近年、特に動画共有サイトの誕生により、こうした時間や場所の制約を受けずに自分の嗜好に応じて選択的に取得する視聴スタイルは若者の中で、非常に人気がある。一方、若者のテレビ離れをよく耳にする。では、若者の動画共有サイトの視聴とテレビ離れに何か関係があるのか？

また、われわれがすでに知っているように、テレビ・メディアは制作費が高く、広告収入に依存するという特徴がある。そのため、テレビ離れという現象が進めば、コマーシャルを見る人も減少し、スポンサーは広告費を出さなくなり、広告費削減は番組制作費削減につながる。それが番組の質の低下を招けば、消費者のテレビ離れを今まで以上に加速化する可能性がある。また若年層だけではなく、中高年層の視聴者も失ってしまう恐れがあるのではないだろうか？急成長したメディア環境の中で、嗜好が多様化になりつつある視聴者に向け、テレビはどのように変容すれば、自分の地位を保つことができるのであろうか？

にもかかわらず、メディア環境がめまぐるしい現在でも、テレビはわれわれの生活の中で重要な役割がある。われわれの生活にテレビが欠かせない理由はなんだろうか？これから、テレビはどのように強みを生み出しながら、いかに若者に向き合い、新たなメディア環境の中で自分の地位を保つことができるのか？

以上な問題意識を背景にして、本論文に着手した。まず若者が動画サイトを利用する方法の違いに応じて、テレビ離れという現象を「受信機離れ」と「番組離れ」という二つの現象に分

けて、分析することにした。

調査により、パソコンや携帯、ゲーム機器、ipadに代表されるタブレット端末など様々なデバイスで、動画サイトに接続している現実がある。しかし見ているコンテンツは相変わらずテレビ番組が多いのも事実だ。このような現象を「受信機離れ」と位置づけ分析した。

一方、テレビ番組を見なくなり、Youtubeやニコニコ動画のような動画共有サイトを利用し、素人が作った映像作品を見始めているという現象を「番組離れ」とした。

本論文の構成としては、「はじめに」で論文の研究背景、目的および全体的な構成を述べる。

第一章では、「受信機離れ」という現象に注目し、テレビ受信機の発展から歴史的に分析する。その上で、ネット時代の視聴スタイルとは、人気になる理由とは、これから視聴スタイルはどのようになるのか、について述べる。

第二章では、「番組離れ」という現象について、旧来の番組制作方法と現在の動画共有サイトの映像の制作方法を比較し、マクルーハンのメディア論に基づいて、動画共有サイトは、ホットメディアかクールメディアか？について検討する。

第三章では、テレビの家庭内での位置の変化、テレビの情報の特徴とテレビが欠かせない理由を見だし、現在のテレビの強みを再び認識する。

おわりに、「受信機離れ」という現象について、テクノロジーのおかげで、受信機は乗り物と同じように、ずっと進化していることに注目する。受信機の進化に伴う、われわれの視聴スタイルも変わってくる。昔の視聴スタイルは、固定な場所で固定な時間にテレビを視聴するが、現在では場所、時間、設備を制限しない視聴スタイルを実現した。これから、さらに素晴らしい設備が出てくることが予想できる。視聴スタイルはどのように変わっても、見ているコンテンツは相変わらずテレビ番組だったら、テレビ番組の制作者たちは自信を失うべきではなく、要するに進化していく受信端末の特徴に応じる番組を作るべきだと提案する。

「番組離れ」という現象から見ると、旧来の番組制作は一方的な発信だ。現在では、テレビのような一方的な発信に対し、動画共有サイトは発信する以外、コメントやシェアなどもでき、発信者と受信者の間で、お互いに情報を共有することが可能になっている。現在では、一方的な発信からお互いに情報共有に変わる。マクルーハンのメディア論に基づき、現状からみると、メディアがクールになればなるほど人気があるだろう。これからさらに参加度を重視すべきだと思われる。インターネットは人々の生活に浸透しており、ネットのない生活は考えられない。したがって、テレビもこのような情報の共有の機能を持つべきだと考えられている。

最後に、テレビはいかに自分の強みを生かし、いかに若者に向き合い、急成長したメディア環境の中で自分の地位を保つことができるかということについて、TVとネットの融合と住み分けを明確にしつつ、アプリの開発や視聴者とのコミュニケーションなどを中心に現場のプロデューサーへのインタビューを交えて提案した。